

社会的交流とチームパフォーマンス 「雑談」がチームを強くする科学的メカニズム

Closing the Psychological Distance: Effect of Social Interaction on Team Performance

服部 圭介 (青山学院大学 経営学部) ・山田 麻以 (日本大学 経済学部)



Take Away: まとめ

- 社会的交流がチームパフォーマンスを高める「メカニズム」の科学的解明
社会的交流は、仲間の「思いやり」の正しい理解を促し、メンバー間の思いやりの温度差を縮めることで、努力が補完的なタスクのチームパフォーマンスを高める。
- 社会的交流が効果的: 損失回避傾向が高い慎重なチーム・同性チーム

■ 実務への示唆

- ① 交流機会の構造化
戦略的投資としてのランチ会や社内イベント
- ② 人事評価システム
向社会的人材は、他の向社会性を高める貴重な存在
- ③ 効率的な社会的交流
損失回避傾向が発しやすいプロジェクトに特に有効
向社会性・感情認知能力の人事における評価
心理的安全な環境づくりでシナジーを活かす

1 Research Background: 背景

- Nike, Airbnb, LEGO などは従業員の「社会的交流」を重視
- 社内イベント、ランチ会、オフィスBARの設置など
- Google や Pixar は、「偶然の出会い」をオフィスに設計
- 社会的交流の効果:
 - メンバーに対する互いの「思いやり」の気持ちが均質化
- 社会的交流が「どのように」チームパフォーマンス向上に役立つかは未解明



2 Research Question: 目的

- ゲーム理論を援用した数理モデルと、大学生を対象としたラボ実験で
- ① チームでの社会的交流が、チームパフォーマンスに及ぼす影響を検証
 - ② 特に、社会的交流がメンバー間の「思いやり」ギャップを小さくする効果に着目
 - ③ 社会的交流が、「なぜ」「どのように」「どのようなチームの」パフォーマンスを向上させるのかを解明

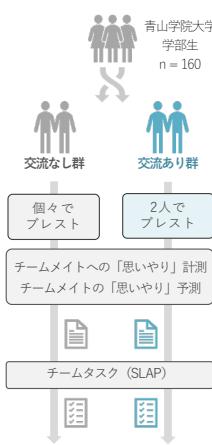
3 Theory & Prediction: 理論と予測

- ゲーム理論を援用した「チーム生産」の数理モデルを構築
- 2人のチームメンバーが、努力が補完的なチームタスクに取り組むようなモデル
- チームメンバーは、チームメイトに対する向社会性（思いやり）を持ち、それが「社会的交流」の程度によって近づく（均質化する）と仮定

- 予測 ①: 社会的交流はメンバーの思いやり（向社会性）ギャップを縮める (♡)
- 予測 ②: 社会的交流はチームパフォーマンスを高める (△)
- 予測 ③: 損失回避傾向の強いチームほど、♡, △の効果が高い
- 予測 ④: シナジーが強いチームほど、♡, △の効果が高い



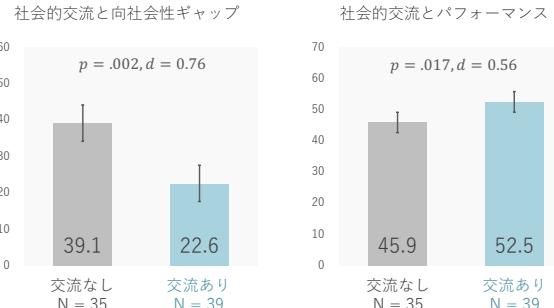
4 Lab Experiment: ラボ実験



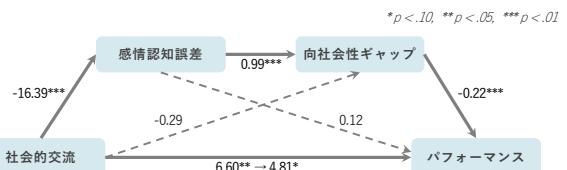
1. 青山学院大学 学生（全学部対象）にて、初対面のペア 74組を作り、交流なし群（対照群）と交流あり群（処置群）にランダム割付
2. 性別や性格特性的測定後、両群ともに同一の簡単な「ブレインストーミング（10分間）」を行う。「交流なし群」は単独で、「交流あり群」では2人で会話をしながら取り組む
3. チームメイトへの「思いやり」や、チームメイトが自分に抱く「思いやり」の推測などをを行い回答
→ 測定: 向社会性（思いやり）ギャップ
→ 測定: 感情認知誤差（思いやり度の推測誤差）
4. 独自開発した SLAPタスクと呼ばれる協力型のタピングゲームを行う（賞金あり）
→ 測定: チームパフォーマンス（ゲームのスコア）



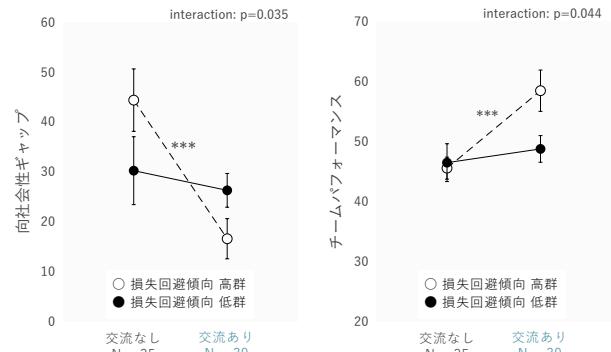
5 Results: 実験結果



➡ 社会的交流は、メンバー間の「思いやり」ギャップを縮小（予測 ①の実証）
➡ 社会的交流は、チームパフォーマンスを高める（予測 ②の実証）



➡ 社会的交流により、仲間が自分に抱く「思いやり」感情の正しい認知を促し
それがメンバー間の「思いやり」ギャップを縮小し、パフォーマンスが向上



➡ 社会的交流は、損失回避傾向のチームの「思いやり」ギャップを小さくし、
チームパフォーマンスを高める（予測 ③の実証）

▽ その他の興味深い結果

- 社会的交流は、特に同性ペアの「思いやり」ギャップを小さくし、チームパフォーマンスを向上させる（予測 ④の実証）
- 社会的交流により、タスクでのコミュニケーションの質と量が有意に向上